

必要としなくなるだろう（彼等は大富豪ではないかもしれないが）。

Take God into your own "home" or body. (This is in one of the coming lessons.) Picture God in the highest degree that you can picture him and adopt his habits you will begin looking like one.

あなた自身の家や肉体に神を取り入れなさい（これは来たるべきレッスンの一つである）。最も高度に神を想像できるように、神を描き、神の特性を取り入れなさい。そうすればあなたは神のように見え始めるだろう。

（訳：浜本・竹島）

オリジナル・インタビュー

## アダムスキー氏との日々〈その5〉

竹島 正

エマ・マーティネリ女史 ■(3)■

### § アダムスキーは金星生まれだった！

誰もジョージの幼少期について知っている人はいません。アダムスキーは本にあるように、両親と共にニューヨークに来たといわれています。ラトビアからであったと思うのですが、彼がわずか2才の時です。私が覚えている中で、当時、アダムスキーのスタッフであったキャロル・ハニーが私に個人的に語った中に、アダムスキーは一度だけスタッフの一人に、「自分がまだよちよち歩きの頃に、宇宙船で地球にやって来たことを思い出した」と語ったとされています。もちろん、伝えられるようにその後、彼がポーランド人の夫婦に預けられたとしても不思議はありません。また、最初の著書である『実見記』の中で述べた宇宙船のパイロット（オーソン）は、宇宙的な意味で兄弟と言ったのではなく、彼の実の兄弟であったのだといわれています。私はそう思っています。私は、彼が1952年、砂漠でオーソンと会見する前から文通していますが、こうした本（私が送った "George Adamski The Untold Story" : 訳注）を見て初めて、いかに彼が人々に広く知られていたかがわかりました。私はほとんど彼の行っていることについて質問をしませんでした。しかし、彼は私がすでに全てを知っているために、質問をしないのだとは考えていなかったはずです。私が質問しないので、彼には新鮮に思えたのかも知れません。私が「二階の少年達 (boys upstairs)」が彼に与えたあのクリスタル・ペンダントを手にして

撫でた時も、他の人には一切触れさせなかったのに、それを止めさせようとはしませんでした。それは長い黒の紐に付けられ、首に掛けられていたようです。

### § 宇宙人があかしたキリストの真の母

それから思い出すままに付け加えますと、生まれ変わりについてアダムスキーが語ったことです。様々な人とこの問題について話し合った時のことです。この地球での死後、私達は直ちに生まれ変わるのであろうか、それとも生まれ変わりの間には、経過時間があるのかということです。一種の消化時間のようなものです。この点について、実に様々な意見が出されました。しかし、ジョージは、この地球での最後の息が新生児の最初の息になる (the last breath here on earth, the first breath in the new baby body) と語ったのです。私は当然のこととして、ジョージの知識はスペース・ブラザーズからもたらされたものだと思います。映画「2001年宇宙の旅」を見ましたか。あの最後のシーンは興味深いですね。死の床にある老人が、最後の息をすると、その新しい幼子が部屋に入ってくるというものです。それから、映画についてですが、これまで私が見た中で最も良かったのは、ロザリン・ラッセルとアレク・ギネスの「A Majority of One」です。異なる種族や文化の間の理解や愛というものを実に明確に表現したもので、私はこの映画なら何度も見たいと思っています。

次にお話することは、信じがたいことですが、宇宙船の中で告げられたこととして、ジョージが話したことです。

アダムスキーと私達45名程の個人的な会合でのことです。彼はこの部屋の中で、誰かイエス・キリストの本当の母親を知っていますかと尋ねました。私は立ち上がって言いました、私達にマグダラのマリアとおっしゃるのではないでしょうねと。彼はとても嬉しそうな顔をして「そうだ」といったのです。彼はマリアはヘロデ家に住み込んでいたのだと言いました。彼女が妊娠した時、ヘロデはその子が自分の子ではないことだけは知っていたので、彼女を放り出したのでした。それ以後、大衆は彼女を売春婦と呼んだのです。勿論、今となってはこれは乱暴な話しであることは承知しています。しかし、私がイエスの復活の後、最初にイエスを見たのがマグダラのマリアであったことを不思議に思うべきではないかと言った時、ジョージは微笑んでいました。母親がその息子を見たいと思うこと以上に、自然なことはありません。私はこうして、言うべきことがあれば、いつでも皆の前に立ち上がって発言したものです。

また、多くの人々がアダムスキーの主張を疑った時もありました。彼が肉体のまま土星に行ってきたと言った時、あるいは母船上での代表会議に出席した時のことです。物事にはいつもユーモラスな面があるもので、私が彼にそこには霊的ないし、精神投影によって行ったのかを尋ねたところ、彼は、わずか数行の返事をよこしました。彼は自分のカミソリを持って行ったというのです。もし、肉体で行かなかつたらとしたら、それは必要ではありませんね。

また、私はアリス (ウエルズのこと：訳註) 自身、真の宇宙人であったとしても、驚きはしないでしょう。或る、どちらかという個人会的な会合で、アダ

ムスキーは真理を求めて非常な不幸な日々を送っていたワシントンDCの上流社会の一婦人について話をしました。彼女は実際、大師を求めてヒマラヤに向かうことになっていましたが、アダムスキーの所に来た後、彼女はそこに留まったのです。私に彼女が求めていたものをアダムスキーに見出したと告げたのが、アダムスキー自身であったか、アリスであったかは忘れてしまいましたが……。そして、彼がこのことを語っている時、私達の集まりの中にアリスはいたのです。彼は決してその婦人の名前を言いませんでしたが、私には直感的にそれが良く分かりました。

### § アダムスキーは怒ったことがなかった

アリスとアダムスキーの二人ともアルコールを嗜みましたが、度を越すことはありません。私達はハイボールを飲みましたし、アダムスキーと私はともに煙草を吸いました。個人的には、アルコールについて余りにも強調した言い方がされているように思えます。

人々が他を引き裂こうとするやり方は実に悪質です。当時、私はサンフランシスコ惑星間クラブ（訳註：エマが参加していたUFO研究グループ）で唯一アダムスキーを知っていて、彼と通じていました。その会の会長は優れた電気技師でしたが、私にアダムスキーは一度、演壇に酔って現れ、立ってられない程であったという話を聞いたと言ったことがあります。私はこのことに憤慨しました。ジョージにこのことを尋ねたところ、彼は目を踊らせてこう言いました。「酔って演壇に立つなど絶対にしてはならないことぐらい、私が知らないでもお思いになりますか」

私が個人的に思いますに、アダムスキーは時として非常に具合が悪くなることがあったようです。しかし、絶対的な必要にかられない限り、欠席したことはありません。彼は強力な意志の持ち主でした。私は自分で立てない程の病気の時も、頑張り続けている彼の姿を想像できます。あのような人はこれまでいませんでした。彼にとって、ほとんどの人が使い物にならなかつたり、あるいは、かたくなな崇拝者でした。ジョージは皆さんに彼が伝えたことを信じることを望んでいました。しかし、18年間に及ぶ長い間、彼を知っていますが、私は一度も彼が怒ったのを見たことがありませんでした。

### 【あとがき】

今回でエマ・マーティネリ女史の部分を終わります。このエマの原稿の大半は、これまで私宛に送られてきた手紙の内容をもとにしたため、話が飛び飛びになりがちになりました。御了承ください。しかし、世にいう「真理の教え」を後世の我々が学ぶ上で、その「真理」の伝え手を身近に感じ、素直に受け入れることも重要な一歩であると思います。そういう意味で、アダムスキーがどのように人々と係わり、彼等に影響を与えて来たかを知ることも大切です。また、我々の前にあるべき未来に対し、必ずしも必要でない些細なことがらも、アダムスキーを身近に感じていただくため、あえて紹介したつもりです。

最後に、エマについてどうしても忘れられないことをこの場を借りて記録に

留めたいと思います。それは、彼女が私と初めて会ったサンタ・ローザのホテルでのことです。当時、まだ元気で目も見えていた彼女は、一人、タクシーを乗り継いでロビーに現れました。手には古びた封書の束をにぎりしめていました。「私がエマ・マーティネリです。これがアダムスキーが私によこした手紙の全てです。読んでください」と言って、私にその握りしめた封書の束を差し出しました。それはエマにとっては是非とも私に手渡さなければならないものであり、また、彼女自身の証でもあったのです。本稿を終えるにあたり、ようやくエマから私に託されたことをお話できたことを喜ぶとともに、このことを現在、病床にある彼女に報告しようと思っています。

---

---

## 天文学に対する情報操作

水 島 保 男

以前、雑誌『たま』（No.52）に、英国の世界的に有名な天文学者であるパトリック・ムーアに関する記事を書いた。

ムーアが、『火星からの空飛ぶ円盤』あるいは、『続・空飛ぶ円盤実見記』の著者、セドリック・アリンガムであったことは、私にも大変な驚きであったが、読者の皆さんも同じように驚かれたに違いない。

アダムスキー氏と何らかの関係のあった人物、例えば、故ケネディー大統領やローマ法王、ユリアナ女王など、アダムスキー氏が1959年の世界講演旅行に出ているときに接触した人々は、アダムスキー氏が1952年にデザート・センターで宇宙人に会見した事実を充分に知っていた人々であった。それどころか、アダムスキー氏の活動に協力し、スペース・プログラムの達成に向けて活動した人々でもあった。

ケネディーは米政界の大物、アメリカの国力をアポロ計画という宇宙計画に向けさせる事に成功した。後に暗殺という残念な結果を招いたが、しかし、宇宙開発に国力を向けるという、地球社会の進化に最も必要な努力はむくわれたというべきであろう。

現在の地球が、たとえ、宇宙的進化の方向に向かっていよう見えなくても、これらの人々は、アダムスキー氏の活動を支持し、最善の努力をしたに違いない。ローマ法王は宗教的な世界に、ユリアナ女王は貴族という社会管理体制の中核を成す特殊な世界に、といったぐあいに、それぞれ努力したに違いない。

政界、宗教界、貴族社会における協力者、あるいはよき理解者たちについて